

ゴットフリートの『トリスタン』

——モーロルト・エピソードについて——

Gottfrieds »Tristan«

——Über Moroldepisode——

斎藤 芙美子

トリスタン伝説の原型ともいべきものはケルト人たちの間に流布していたモーロルト物語である。それは大要次のような内容であった。¹⁾

トリスタンはコーンウォールを恐怖に陥れていた巨人モーロルトを打ち殺す。だがその際彼自身もその巨人の毒槍で傷つけられた。しかしその傷を誰ひとり治すことはできなかった。そこでトリスタンは剣と堅琴を携え、小舟に身を横たえ、波の間に間に舟をただよわせる。彼は人々から遠く離れて死に果てるつもりであった。ところが風と波が彼を遠くの見知らぬ島へと運んできた。この島で彼の傷を治すことのできる一人の妖精と出会う。実はこの妖精こそ巨人モーロルトの妹であって、トリスタンに恋してしまった。トリスタンの方は傷が癒えると、コーンウォールへ帰ってしまった。

ゴットフリートはこの前半部分、即ちトリスタンがモーロルトと戦い、傷を負うまでをモーロルト・エピソード（5867行から7230行まで）に、後半部分をタントリス・エピソード（7231行から8225行まで）に仕上げている。本稿はこのモーロルト・エピソードを、ゴットフリートがどのように物語って、彼の独自性を発揮しているかを分析しようとするものである。

I

故国バルメニーエを去って、再びコーンウォールのマルケ王のもとに戻ったトリスタンを待ち受けていたのは、「アイルランドから恐ろしく強いモーロルトがやってきて、コーンウォール及びイングランド両国の貢租を決闘によってマルケ王に要求しているという」³⁾（5872—5877）事件であった。このモーロルトはアイルランドの「豪胆王グルムーン」⁴⁾（5882 Gurmun Gemuotheit）に自分の妹を嫁がせており、「その国の大公であって、彼自身もど

こかで一国を支配していてもよかった。というのも、彼は非常に大胆で、領地もあれば多くの財産も持ち、体力も気力も兼ね備えていた。この人物が王の戦士の先鋒となっていた⁵⁾ (5935—5941)。このようにゴットフリートはモーロルトについて説明する。

500年頃北アフリカに住んでいたヴァンダル王族の後裔として歴史上実在していたグルムーン王の名前が⁶⁾「『トリスタン物語』との関連において伝えられているのは、ゴットフリートの作品のみであるが、彼は5881行に〔正しい出典〕としてトマ(Thomas)の手本をはっきり指示している⁷⁾」。即ち、「正しい出典が伝えるように、彼は豪胆王グルムーンと呼ばれており、アフリカの生れで、父はその地の王であった。父が亡くなった時、その国は彼と彼の弟の支配下となった。弟も彼と同じく継承者であった。しかしながらグルムーンは非常に覇気があり、豪気であったので、誰れとも財産を共有するつもりはなかった。彼自身が主君でなければ、彼の気持が許さなかった。……同時に全ての領土を弟に残した。こうして直ちに出発し、名にし負う権勢高きローマ人たちから、彼が力で征服したものは、彼の私有となり、そのうちからローマ人たちに若干恭順の意を表わして貢租を出すという許可と全権を手に入れた。そして最早やぐずぐずしてはいなかった。彼は強力な軍を率いて、陸をこえ海を渡って、到頭アイルランドまでやってくると、その地を征服し、人々に彼を無理矢理主君とし、国王として受け入れるよう強要した⁸⁾」(5881……5919)とゴットフリートは語っている。

興味深いのは、この記述が、1135年頃ウェールズ人ジョフリー・オブ・モンマス(Geoffrey of Monmouth)によって書かれた『ブリテン王列伝』(Historia Regum Britannie)を1155年頃アングロ・ノルマン人ヴァース(Wace)がフランス語韻文に翻訳した『ブリュ物語』(Le Roman de Brut)の中の以下の記述と殆ど重なっていることである⁹⁾。

「グルムーンは富があり、力があり且つ人間として非常に勇敢であった。彼は大胆で心気高く、高貴な血管をうけていた。彼はアフリカの出身で、異教を信奉していた王の息子であった。彼がその気になれば、父の跡をつぎその王国を手に入れ、その王となることもできたのに、彼はそれを望まなかった。彼はそうせずに、国を兄弟の一人に譲った。弟の一人に彼の領土と栄誉を譲った。そして彼は宣言した、もし自分で一国を手に入れない限り王とはならないであろうと。また海を渡って征服を狙い、よその土地で王になるであろうと宣言した。……こうしてはるばる海を渡り、いく多の王を打ち負かし、国々を征服し、遂に無事アイルランドに到着し、その国を速やかに手に入れ、自分をアイルランド王と呼ばせた」(13385……13420)。

ゴットフリートの説明と『ブリュ物語』から引用の記述との相似を考える際に、ゴットフリートが「正しい出典」と呼んだトマの作品を抜きには論じられないであろう。しかし残念ながらトマの『トリスタン』はその全体の9分の1と推察される3144行の断片しか現存していないし、モーロルト物語に関しては消失してしまっている¹⁰⁾。ただトマを手本とし

て翻案された『トリスタン物語』として、ゴットフリートの作品以外に5編が残されている。その中では1226年古ノルウェー語で書かれた『Tristrams Saga ok Ísondar』がトマの作品を窺い知るには最も近いといわれているので、ある程度の推測は可能となっている。ポーナート(Gesa Bonath)によれば、「トマはヴァースを色々引用した。ヴァースを引用したり、ほのめかしたりすることによって、『ブリュ物語』に精通していた聴衆をトマが獲得しようとしていたのは明らかである¹¹⁾」という。12世紀後半から13世紀前半にわたる中世宮廷文化の最盛期を、心行くまで享受していた当時の聴衆の耳を真に満足させるためには、ゴットフリートもまたトマを見習って、「ロマン語やラテン語のあらゆる本」(158—159)¹²⁾を渉猟しなければならなかった。そしてゴットフリートもまた『ブリュ物語』からグルムーン王を借用することが必要だと判断したのであろう。

では、トリスタン伝説の中で最も古い神話的な素材であった巨人モーロルトとトリスタンの戦いを語り始めるにあたって、トマもゴットフリートも、モーロルトを『ブリュ物語』の中の豪胆王グルムーンの義兄としたのは何故であろうか。トマをして『ブリュ物語』に裏付けられたモーロルト像を創り上げさせた原動力は、「素材へ忠実であろうとするよりも、蓋然性を求め、それによって事件の連結性を求めていたと解されるトマの真実性志向¹³⁾」にあったと思われる。その結果「モーロルト物語に多大の歴史的権威が付与される¹⁴⁾」とトマは考えたのであろう。ゴットフリートがトマのグルムーン借用を見習った唯一の詩人であったのも、やはりトマと同様に、真実性を志向し、歴史的権威のある物語を聴衆に伝えようとしたからに他ならない。ゴットフリートがプロローグの中で、『トリスタン物語』を語るいろいろな詩人たちが、「ブリタニアのトマが語るようには正しくは語らなかった。トマは物語の大家であった、そしてブリタニアの本であらゆる君主たちの生涯を読んで、それをわれわれに知らせてくれた¹⁵⁾」(150—154)と称える所以である。

II

トマやゴットフリートが彼らの物語に蓋然性や真実性を追求しようとした創作姿勢は、コーンウォールとイングランドに対するモーロルトの貢租要求の描写に微妙な変化をもたらしている。この両国は1年目には銅300マルク(この時代のマルクは約234gの重量単位を表わしている)、2年目には銀300マルク、3年目には金300マルクをアイルランドへ送らなければならなかった。そして4年目には子供を人質として提供することになっていた。5年目がめぐりくると、この両国はローマへ使者を送り、元老院の命令と勧告を伺わなければならなかった、「というのも、彼らがローマ人を見習って、どのように法と領国の掟を施行し、どのように裁判を行っているかを、いつでもローマ人の前で読み上げ、報告していたからであった¹⁶⁾」(5992—5996)。

このように5年を一巡として、コーンウォールとイングランドがローマに対して「恭順の意を表わす貢をしたのは、必ずしも法のためや神のためではなく、全くグルムーンの命令のためであった」(6003—6006)¹⁷⁾という。そして今モーロルトが4年目に当る人質の子供、「官仕えができ、器量の点で宮廷にふさわしい美しさと好ましさを兼ね備えている、少女ではなく、少年だけ」(5959—5963)¹⁸⁾を両国から各々30人づつ求めてやって来たゴットフリートは説明している。

上記の貢租に関する説明には二つの点で他の『トリスタン物語』とは異っている。第一は、貢租がグルムーンの命令で徴収され、ローマへ送られるという構図を明示していることであり、第二は、人質として少女を入れず、少年ばかりに限定している点である。

第一の問題に関しては、ジョフリー・オブ・モンマスやヴァースが、イギリスからローマ人に対して貢租が支払われていたと記述しているのを踏まえ、トマはグルムーンによって要求される貢租がローマ人に支払われていたと想定したのであろうと指摘されているが、ゴットフリートもこの構図が最も歴史的真實性があると考えたのであろう。というものも、トマ以外の物語、例えばアイルハルト (Eilhart von Oberge) の場合には、大体次のように説明されるのみで、ローマとの貢租関係は浮び上ってこない。即ち、モーロルトは妹をアイルランド王に嫁がせている四人力をもつアイルランドの勇士であった。コーンウォールの若いマルケ王は唯ひとり、他の隣国がアイルランド王へ貢租を支払っているにも拘らず、15年以上も貢租を拒絶していたので、モーロルトはある日コーンウォールへ乗りこんできて15歳の子供、男女を含めて、その3分の1を要求したのである(351—442)²⁰⁾。

ローマとの貢租関係をトマとゴットフリートのみが述べているのは、他の詩人よりも、両詩人がより歴史的真實に近い、より歴史的蓋然性を備えた構図を追求したからに他ならない。またこういう設定こそ当時の中世宮廷社会の聴衆を真に納得させたのであろう。

アイルハルトが15歳の子供、男女を含めて3分の1を人質に要求したと語っているのに対し、ゴットフリートはわざわざ「少女ではなく、少年だけ」と断っているのが、第二の相違点である。この点に関しても、「ゴットフリートに先立って、すでにトマがアイルハルト版を論難していただろう²¹⁾」といわれている。

そもそも少年少女を人質に要求するエピソードの源流はギリシャ神話に溯る。²²⁾クレタ王ミーノースが息子アンドロゲオースの死に復讐するため、アテネに攻めこみ、〈ミーノースの牡牛〉といわれた半人半牛の怪物ミーノータウロスに毎年少年少女を7人づつ貢として送らせたという逸話に、当時の宮廷社会の聴衆はすでに精通していた。

またアイルハルト版では、モーロルトは「むすめたちにはわが館において、いずれ銀貨を稼いでくれるようにしましょう」(438—442)²³⁾と語っている。オッケン (Lambertus Okken) によれば、²⁴⁾古典古代後期の作である『アポローニウス王物語』の主人公アポローニウス王の運命とトリスタンの運命は重なり合う部分が多いという。「『アポローニウス王物語』は

12世紀末から13世紀初頭のフランス及びプロヴァンスの詩人たちにはよく知られており、『アポローニウス王物語』が『トリスタン物語』にその影をとどめたことは不思議ではない²⁵⁾し、アポローニウス王の娘タルジアが売られる娼家の主に、アイルハルト版のモーロルトは似ていると云えるかもしれないとオッケンは指摘している²⁶⁾。

このように当時の宮廷社会によく知られていた〈怪物ミーノータウロス〉の話や、アイルハルト版のモーロルト像を聴衆が連想するのを避けるために、ゴットフリートはわざわざ「少女ではなく、少年だけ」という断わりを追加したと考えられる。モーロルトを「豪胆王グルムーン」の義兄として、歴史的権威と歴史的蓋然性をもって語ろうとすれば、ゴットフリートはモーロルトから怪物や娼家の主の臭を払拭して、すでに引用した記述(5935行から5941行)のように、勇猛果敢な騎士像を彼のモーロルトには付与しなければならない必然性を持っていたと筆者には思われる。

III

このゴットフリートのモーロルト像に対して、全く新しい仮説を提示しているのが、ベルント・トゥム (Bernd Thum) である。ローマへ送るべき貢租をグルムーン王の代理人として徴収にやってくる「モーロルトは、ブルグントの宮中伯〈よその〉オッターを模して創られている²⁷⁾」という。バルバロッサ・赤髯王と呼ばれた神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世の3男として、1190年頃ライン上流のブルグントへ神聖ローマ帝国の代理人として乗り込んできて、皇帝権を笠に着てその地方の貴族や司教に対し猛威をふるっていたオッターがゴットフリートの頭の中に浮んでいたのではないかという仮説である。「モーロルトが年若い貴族たちを人質として、彼の主君グルムーンの宮廷へと強制連行していく場合、それはゴットフリートの同時代人にとって童話的モチーフではなかった、というのもシュタウフェン家の人々は上級貴族に対して同じ政策を推し進めていたからである²⁸⁾」という。勿論トゥムもモーロルト伝説が非常に古い素材であることは認めながらも、「しかし1210年頃ライン上流に住んでいた『トリスタン』の聴衆たちが、モーロルトの姿に彼らのよく知っているあの宮中伯を連想したということ、そして彼の行為の記憶は、聴衆たちが政治上社会上わかり合えるレパートリーの一つであり、そのレパートリーによって世間というものを解釈していたということは、大いにありうると思う²⁹⁾」と主張するのである。

トゥムの仮説は興味深いものであり、またゴットフリートが「トリスタンの刀礼³⁰⁾」や「モルガン・エピソード³¹⁾」でみせた同時代の社会に対する積極的関心を考えれば、トゥムの主張するような意図が詩人にもあったかもしれない。しかしゴットフリートのモーロルト・エピソード全体の構成から判断すると、筆者にはトゥムの仮説が一面的に過ぎるように思われる。ゴットフリートの焔眼はブルグントという一地域の事件をこえて、もっと広

く、もっと深く、歴史の流れを見据えていたのではなかろうか。だからこそ詩人は『ブリュ物語』に依拠して歴史的眞実性に迫ろうとしたトマに共鳴しえたのであり、自分自身も『ブリュ物語』を下敷きに歴史的蓋然性のあるモーロルト物語を再生することを目指したのであろう。そのためのプロットの一つが既にみてきたグルムーンを通してローマへ送られる貢租の設定であったし、人質を敢えて少年だけに限った改変でもあったと思われる。

更にこのゴットフリートの意図をより鮮明にするのが、人質という「この恥辱から、一騎打ちか、或は国と国との戦いによらない限り、決して逃れることはできなかった」(5966—5969)³²⁾というプロットの設定である。ここで見逃してはならない言葉は「国と国との戦い」(5969 *lantvehte*)である。しかもこの表現をゴットフリートはトリスタンにもモーロルトにも重ねて語らせている。

まず、トリスタンの鼓舞をうけて人質を拒絶する決意を固めたマルケ王とその宮廷の人々に向って、モーロルトは「信義と誓い」(6355 *triuwe und eit*)及び「協定」(6356 *sicherheit*)を破るものと非難する。それに対してトリスタンは次のように答えている。「みな誰ひとり信義も誓いも破りません。かつて我々との間に取り交わされた誓約と協定、つまり、毎年アイルランドへ自由意志でコンウォールとイングランドから、指定されている貢租を送り届けるか、それとも、一騎打ちか、或は国と国との戦い(*lanther*)によって身を守るかということは、今でも効力があるはずで、今もそのつもりがあり、信義と誓いを、貢租かはたまた戦いかによって果たすのであれば、あなた方に対して全く正当なことをしているのです。貴殿、その点をよくお考えになって下さい。熟慮のうえ、あなたにはどちらが都合か、私にお伝え下さい。一騎打ちかはたまた国と国との戦いか(*lantstrit*)、あなたがどちらになさろうと、そのことはいついかなる時でも、我々に関する限り確約され、保証されております。ただし槍と剣がわが方とあががとの間のけりをつけなければなりません。さあ二つのうちから一つを選んで、われわれに云って下さい。貢租は何であれ願ひ下げです」(6362—6388)³³⁾。

これに対してモーロルトも同じ表現を用いて答える、「国と国との戦い(*lantstrite*)に安心して馬を進めるほど今ここではわが方は多くはない。従来通り私は国からごくうちわの兵をつれて海を渡り、穏やかにこの国へやってきた。こういうことになろうとは思ひもよらなかった」(6392—6400)³⁴⁾と。

それに応答して、「貴殿、あなたのお気持が国と国との戦い(*lantstrite*)をよしとなさるのであれば、直ちに引き返され、お国へ戻られ、騎士たちを呼びよせ、全軍を結集して再びここへお越しになり、我々の身にいかなることが起るのか見せていただきたい」(6407—6414)³⁵⁾とトリスタンは語っている。

トリスタンとモーロルトの上記のやり取りから、貢租を送るか、それとも一騎打ちか、はたまた国と国との戦いによって決着をつけるかは、協定によって取り決められていると

いうプロットが再び明確になってくる。クローン (Rüdiger Krohn) は「アイルハルトや『サーガ』 (Tristrams Saga ok Ísondar のこと) では一騎打ちの可能性についてのみ語られている。国と国との戦いという選択肢はゴットフリートの付け加えのようである³⁶⁾」と指摘しているが、ここで検討すべき課題は、貢租か一騎打ちかというモーロルト物語の通説を踏襲せずに、何故ゴットフリートが「国と国との戦い」 (lantvehte, lanther, lantstrit) という新しい選択肢を付け加え、しかも聴衆の耳にはっきり残るようになんども繰り返したのかという問題である。

この問題を解く鍵は、トリスタンがマルケ王とその宮廷の人々の前で、モーロルトに対して答える次の言葉に隠されているように思われる。「この国とイングランドからアイルランドへ今まで長い間貢租が不当にも送られていきました。多大な強要と強大な暴力によって長年こういう事になったのです。というも両国の城砦や街は陥落し、人々に大きな損害が加えられ、その結果人々は不当な暴力に押えこまれ、まだ生きのこっていた立派な勇士たちも命じられたことには全て従わざるを得ませんでした、というも彼らは死を恐れていたし、そういう時にはそうするより他には仕方がなかったからです。今日でもごらんになれるように、多くの不法なことがその後ずっと人々の上に加えられて来たのです。実際とっくにこの大きな屈辱を戦ってはね返すべき時期がきているのではないのでしょうか。というも人々は大きな発展をとげたからです。両国では土着の者も渡来の者も増加し、街や城砦も増え、資産も税収も増えたのです。今までに悪化してきたことを取り戻さなければなりません、というも我々全員の安全はこれからは力に依らなければならぬからです。いつも安泰であろうと思えば、我々は戦い遠征してそれを確保しなければなりません」 (6266—6302)³⁷⁾。

コーンウォールの人々に国と国との戦いへ奮起を促すトリスタンの上記の台詞は、『ブリュ物語』の中でスコットランド王アングセルがアーサー王に向かって、ローマの貢租要求を拒絶し、反対にローマ征服の戦いを行うよう促す場面での次のような台詞と対比されている³⁸⁾。

「あの連中は我々の祖先がいつも彼らの祖先に貢租を支払っていたと云っております。わが祖先が彼らに貢租を渡したなどと信じてはなりません。また貢租を送ったなどと信じてはなりません。わが祖先は貢租を渡したり、送ったりしたのではなくて、あの連中が力づくでわが祖先から貢租を奪い取ったのです。我々は、さあ、あの連中から力づくで貢租を奪い返そうではありませんか！」 (10997—11003)

『ブリュ物語』のこの台詞に比べれば、上記トリスタンの台詞は表現力の点でゴットフリートの技量を遺憾なく示しはするが、両台詞のプロットはまさに同一である。『ブリュ物語』では、伝説的なアーサー王はブリテンの歴史上の英雄として描かれ、ローマからの年貢要求に憤激してローマ遠征を行うブリテン王として位置づけられている。スコットラン

ド王の台詞はまさに「国と国との戦い」という国際間の紛争を取り上げた壮大な歴史書の一頁なのである。

ゴットフリートが貢租か一騎打ちかという通説通りの二者択一を退け、「国と国との戦い」という新しい選択肢をわざわざ導入したのは、やはり『ブリュ物語』を参考に、ローマ・アイルランド対コーンウォール・イングランドの貢租問題を歴史的蓋然性のある国際間の紛争問題として位置づけたいという詩人の内的要求によるものだと筆者は解釈したい。

IV

この詩人の内的要求は更に次のプロットを展開していく。

「国と国との戦い」をよしとするなら、アイルランドへ引き返し、全軍を率いて再来するようにと勧めるトリスタンの言葉に対して、「グルムーン王は貴公の軍旗や攻撃の手に対して、臣民や国土の心配をなさることはあるまいと私は確信している。それにこのような厚顔無恥は、信義と誓いが破られる折には、決してアイルランドまで引き延ばしてはおかれない。我々がここでわが手で³⁹⁾二人の間で、試合の場で、貴公が正しいか、私が正しいか決しよう」(6439—6449)とモーロルトは答える。

上述のように、アイルランド王グルムーンはコーンウォールとの「国と国との戦い」を何ら危惧しなくてよいが、コーンウォールからアイルランドへの遠征を待つまでもなく、トリスタンとの一騎打ちで決着をつけようとモーロルトが語るのに対し、トリスタンは、どちらが正しいか、「それを神の助けを得て証明してみましょう、われら二人のうち正しくない者が神が滅ぼされますように！」(6450—6453)⁴⁰⁾と応じる。

更に続けて「方々、よく御承知下さい。わが国王もここにおられる全ての方々も、私が取り決めに破らないように、この決闘の申し合せをいかに行うか、お聞きいただきたい。ここにおられるモーロルト殿も、彼をここへ遣わされた方も、他のいかなる方も、暴力でコーンウォールとイングランドから貢租を取り立てたのは正しくなかったということ、そのことを私は神にも世間にも、この目の前の殿方と決闘して立証しようと思ひます。この殿方は両国のこれまでの屈辱と苦悩を、ずっと与え続けてきた人なのです」(6456—6472)⁴¹⁾とトリスタンは述べる。

上記のトリスタンの見解は、「ゴットフリートの自然法的な⁴²⁾考察」であるとカムブリッジ(Rosemary Norah Combridge)は指摘しており、「本来トリスタンは、トマの場合もゴットフリートの場合も、グルムーンがイギリス征服に伴って行なった貢租徴収は、初めから違法な暴力行為であって、そういうものとして戦いによる正当防衛は当然であるという見解に立っている」⁴³⁾と看做している。

カムブリッジがこのような見解を抱くに至るのも、ゴットフリートがトリスタンに神と

正義に対する絶対的信頼を吐露させているからであろう。トリスタンはモーロルトとの一騎打ちを引き受けようとして、「ただし私は戦いに際して神と正義という勝利へ導びく二人の助太刀をもっている、この両者が私と共に戦いに赴くでありましょう」(6183—6186)⁴⁴⁾と宣言している。また一騎打ちの試合場となる島へ向って小舟に乗り込む時にも、「マルケ王さま、私の体や命のことを余り御心配になりませんように。我々は一切のことを神に委ねましょう。……我々の勝利や幸運は騎士の力によるのではなく、神のお力によるのです。……私と共に試合場へ赴き、戦いに臨まれる神が正義を正義たらしめて下さいますように！ まこと神は私と共に勝利をうるか、私と共に負けて倒れるか、しなければならぬのです。神よ、お心のままに、守り給わんことを！」(6757……6783)⁴⁵⁾とトリスタンは語っている。

そしていよいよ「四人力をもっていた」⁴⁶⁾モーロルトと、「一人目は神、二人目は正義、三人目はこの両者の下僕であり忠実な召使い、即ちまことに忠実なトリスタン、四人目は困難に際し奇蹟を行う意志の力」(6883—6888)⁴⁷⁾との四人対四人の決闘ともいべきこの一騎打ちで、トリスタンはモーロルトの毒を塗った剣により太腿に致命傷を負う。しかし「神と正義」(got unde⁴⁸⁾ reht)という戦友をもつトリスタンが遂にはモーロルトの頭上に一太刀浴びせ、次のように語る。「モーロルトよ、神のお助けで、さあ申してみよ！ これがどういふ事かわかるか。お前は深手を負っていると思う。お前の状態は悪いようだ。私の傷はどうであれ、お前にはよく効く薬草がいるようだ。お前の妹イゾルデが医術について学んだことが、治ろうとすれば、お前には必要となる。公明正大な神が、神のまことのお心がお前の不正をよく見極められ、私をして正義を正義たらしめられた。神が今後も私をお守り下さいますように！」(7066—7080)⁴⁹⁾。トリスタンは「そう云うと一層相手に近づいた。彼は剣を取り、両手でもった。彼は相手の首を、鎖の頭巾もろとも打ち刎ねたのである」(7081—7085)⁵⁰⁾。

上記のように、ゴットフリートのトリスタンは神と正義に対し絶対的信頼を抱いている。だからこそトリスタンは「神の審判では、決闘によって正義が証明されうる」⁵¹⁾と確信しているのである。

では何故ゴットフリートは、トリスタンとモーロルトの一騎打ちに神の審判が下るといふプロットを設定したのであろうか。カムブリッジは「貢租というのは、国内的な問題ではなく、国際的な問題である、従って裁判官は超国家的でなければならない。だからこの一騎打ちは神の審判であるばかりか、本来の意味で神の法廷で行われると定義しうるのではなかろうか」⁵²⁾と推論している。この推論はまことに正鵠を得ていると思われる。ただカムブリッジの矛盾は、「貢租というのは、国内的な問題ではなく、国際的な問題である」と捉えながら、ゴットフリートが貢租か一騎打ちかという通説通りの二者択一を退けて、「国と国との戦い」という新しい選択肢をわざわざ追け加えたことを看過している点にある。

カムブリッジは「私はモーロルト・エピソードの土台をなす国際的な法関係は脇へおく（注——これはそれ自体一つの論文になろうが、ゴットフリートの作品解釈には殆ど寄与しないであろう）」⁵³⁾として、「国と国との戦い」という新しい選択肢の意義を考察しようとしな

い。
 ゴットフリートが「国と国との戦い」という、貢租を国際間の紛争問題として捉える新しい選択肢を追加したのは、トリスタンとモーロルトの一騎打ちが「国と国との戦い」の代理戦争であることを示すためであったと筆者は解釈したい。だからこそ、トリスタンの勝利は国と国との間の貢租徴収という暴力行為について起国家的な存在者である神が下された審判を意味するといえよう。トリスタンの勝利をこのように解釈してこそ、『ブリュ物語』を下敷きにしてモーロルト・エピソードを再構成せずにはおられなかったゴットフリートの内的要求に我々は近づきうるのではなからうか。

だが一方では、トリスタンとモーロルトの一騎打ちとして有名なこのエピソードは、旧訳聖書のサムエル記にある〈ダビデとゴリアテの戦い〉に共通している点が多いと指摘する研究者もある⁵⁴⁾。特に、すでに引用したトリスタンがモーロルトの首を刎ねる描写（7081-7085）は、ダビデがゴリアテに石を投げて殺した後で首を刎ねる場面を想起させる⁵⁵⁾。「トリスタンが決定的に勝利を納めた相手から、更に首を刎ねるというこの特に目につく残忍さは、アイルハルトにも『サーガ』（Tristrams Saga ok Ísondar のこと）にも見られない⁵⁶⁾」と指摘されるように、ゴットフリートの描写がサムエル記の表現を連想させることも事実である。

しかしながら、筆者には、ゴットフリートがただ単に、「この種の荒っぽい調子や行為に、文学の上であれ、現実それ自体の中であれ、馴れ親しんでいた聴衆に向けて自己の物語の娯楽性を一層高めるために⁵⁷⁾」だけ、「この特に目につく残忍」な描写を行ったとは考えられない。トリスタンとモーロルトの一騎打ちは、すでに述べたように、「国と国との戦い」の代理戦争であって、超国家的存在者である神が国家間の貢租問題に審判を下すとすれば、ダビデとゴリアテの戦いに神が審判を下された場合と同様の結果になることを、敢えて残忍な結末まで語ることによって聴衆に訴えかけずにはおれない内的要求にゴットフリートはつき動かされていたのであろう。

V

モーロルト・エピソードを物語るに際し、『ブリュ物語』を参考に、歴史的眞実性と歴史的蓋然性を追求して、グルムーン王の導入、ローマとの関係、少年のみの人質、国と国との戦いの代理戦争としての一騎打ち、そして神の審判というプロットを次から次へと創出せずにはおれなかった詩人の内的要求を解明するためには、ゴットフリートの『トリスタ

ン』が作られたと推定される1210年頃のヨーロッパ中世盛期を筆者は問題にせざるをえない。

この時期はローマ教皇インノケンティウス3世の在位(1198年—1216年)とぴったり重ってくる。バルバロッサ・赤髯王フリードリヒ1世の長子として神聖ローマ皇帝を継いだハインリヒ6世は、ローマ教皇のおひざ元に当るシチリア王とロンバルディア王を兼ねるまでに勢力を拡大し、強大な俗界権力者としてローマ教会を不安に陥れるまでになっていたが、インノケンティウス3世が即位する前年、1197年に急逝した。長子フリードリヒはまだ3歳に達しない幼児であったため、その保護が、遺言によってローマ教会に依頼された。そしてドイツ国内では皇帝権の継承者決定をめぐる、ハインリヒ6世の弟、フィリップ・フォン・シュワーベンを推す一派と、かつてバルバロッサの宿敵であった故ザクセン大公ハインリヒの息子であるオットー・フォン・ブラウンシュヴァイクを推す一派とが激しく対立する。この両派から皇帝としての認証を求められることになったインノケンティウス3世は、天才的な政治力を発揮して、ローマ教皇という聖界権威をもちいて俗界権威に対し強力な干渉を行ったのがこの時期であった。

最初インノケンティウス3世はオットー支持にまわったが、フィリップが攻勢に転じるやフィリップ承認へと態度を変えていく。しかしフィリップが1208年私怨によって暗殺されてしまったので、再び1209年オットーに神聖ローマ皇帝の帝冠を授けた。

だがこの両派の抗争はドイツ国内の内乱だけでは留まらなかった。当時イギリス、フランスでは王権が勢力を拡大し、領土問題で対立状態にあった。一方でオットーがイギリス国王リチャード1世と同盟関係にあったのに対し、フィリップはフランス国王フィリップ2世と同盟を結んだ。1199年リチャード1世が没したので、弟のジョンがイギリス王位を継いだ。ジョンはその頃オットーを支持していたインノケンティウス3世の依頼にも拘わらず、オットーとの同盟関係を破棄してしまった。しかし1202年フランス国王が領土問題でジョンに戦いを挑むと、インノケンティウス3世はジョン側につき、フランス国王フィリップ2世に和平を強く求めた。だがフィリップ2世はこれを無視したばかりか、教皇とジョンへますます対抗姿勢を強めていった。ところが1207年教皇はカンタベリー大司教の任命をめぐるジョンと対立し、破門するに至るが、1213年ジョンが教皇に折れ、イギリスを教皇に献じ、改めて教皇から封土を受け取るという条件までのまされることになる。

この間オットーは1210年南イタリアへ兵を向けた。彼はシチリア王国で成長しているハインリヒ6世の遺児フリードリヒを将来の競争者として恐れたからである。しかしインノケンティウス3世がフリードリヒ側についた結果、ドイツ国内の内乱は一層激化した。1214年フランス国王フィリップ2世は、フランス王権の威信を全ヨーロッパに輝やかせたといわれるブーヴィーヌの戦いで、イギリス王ジョンに圧勝し、ジョンの助勢にかけつけたオットー軍は、競争者フリードリヒが攻めてくるのを待つまでもなく壊滅してしまったので

ある。

上述のように、ドイツの宮廷社会がインノケンティウス3世というローマの聖界権威にふりまわされ、「国と国との戦い」を繰り広げ混迷をきわめていた時期に、ゴットフリートは『トリスタン』を創作していたのである。ゴットフリートはこのような混迷と危機の時流を鋭く洞察していたからこそ、モーロルト伝説を神話の世界から歴史的真實性のある物語へと再生したいという要求に駆られていたのであろう。「国と国との戦い」の代理戦争として、モーロルトとトリスタンの一騎打ちに下された苛酷なまでの神の審判は、ゴットフリートの警世の一文であったのではなかろうか。

注

- 1) 『相愛女子大学・女子短期大学研究論集』第22巻、拙稿参照。
- 2) Bodo Mergell: Tristan und Isolde. Ursprung und Entwicklung der Tristansage des Mittelalters. 1949. S. 12.
- 3) 『相愛大学研究論集』第1巻、拙稿参照。
- 4) 5872—5877.
 daz von Irlande wære komen
 Morolt der sere starke
 und vorderte von Marke
 mit kampflichen handen
 den zins von beiden landen,
 von Curnwal und von Engelant.
 引用は Gottfried Weber: Gottfried von Strassburg Tristan. Text, Nacherzählung, Wort-und Begriffserklärungen. 1967. による。
- 5) 5935—5941.
 der was ein herzoge da
 und hæte ouch vil gerne eteswa
 selbe ein lant besezzzen ;
 wan er was wol vermezzen
 und hæte lant und michel guot,
 lip unde manlichen muot.
 der was sin vorvehtære.
- 6) Lambertus Okken: Kommentar zum Tristan-Roman Gottfrieds von Strassburg. 1. Band. 1984. S. 307.
- 7) Gottfried von Strassburg, Tristan. Nach dem Text von F. Ranke neu hrsg. ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von RÜDIGER KROHN. Band 3. 1981. S. 82.

8) 5881……5919.

und als daz rehte mære seit,
der hiez Gurmun Gemuotheit
und was geborn von Affrica
und was sin vater künic da.
do der verschiet, do viel daz lant
an in und sines bruoder hant,
der als wol erbe was als er.
Gurmun was aber so richer ger
und also hohe gemuot,
daz er dekein gemeine guot
mit niemanne wolte han.
sin herze enwolte in niht erlan,
ern müese selbe ein herre wesen.

……

und liez ouch an der stunde
sinem bruoder al sin lant.
sus kerter dannen zehant
und nam von den mæren,
den gewaltegen Romæren
urloup unde botschaft,
swaz er betwünge mit craft,
daz er daz zeigen hæte
und ouch in da von tæte
eteslich reht und ere ;
und enbeite ouch do niemere :
er vuor mit eime starken her
über lant und über mer,
biz daz er zIrlande kam
und an dem lande sige genam
und si mit strite des betwanc,
daz sin ze herren ane ir danc
und ze künege namen

9) L. Okken : *ibid.* S. 307f.

10) Thomas Tristan. Eingeleitet, textkritisch bearbeitet und übersetzt von GESA
BONATH. 1985. S. 9ff.

11) G. Bonath : *ibid.* S. 17.

12) 158—159.

in beider hande buochen
walschen und latinen

- 13) G. Bonath : *ibid.* S. 20.
 14) L. Okken : *ibid.* S. 310.
 15) 150—154.
 als Thomas von Britanje giht,
 der aventiure meister was
 und an britunschen buochen las
 aller der lantherren leben
 und ez uns ze künde hat gegeben.
 16) 5992—5996.
 wan man in alle jar da las
 und teten ouch kunt mit mæren,
 wie si nach Romæren
 loys unde lantreht solten wegen,
 wies ir gerihtes solten pflegen ;
 17) 6003—6006.
 doch butens ir dise ere
 niht ellich also sere
 weder durch reht noch durch got
 so durch Gurmunes gebot.
 18) 5959—5963.
 sin kint, daz dienestbære
 und an dem libe wære
 so schœne und so genæme,
 als ez dem hove gezæme,
 niht megede, niuwan knebelin,
 19) L. Okken : *ibid.* S. 310.
 20) Eilhart von Oberge. Hrsg. v. FRANZ LICHTENSTEIN. 1973. S. 41ff.
 21) L. Okken : *ibid.* S. 313.
 22) dito :S. 312.
 R. Krohn : *ibid.* S. 83.
 23) Eilhart : *ibid.* S. 44. 438—442.
 sô wil ich die magedin
 minem hûrhûse tûn zû,
 daz sie mir spâte unde frû
 gewinnen dar inne
 silber und pfennige.
 24) L. Okken : *ibid.* S. 136ff.
 25) dito : S. 139.
 26) dito : S. 313.
 27) Bernd Thum : *Aufbruch und Verweigerung* 1980. S. 430.

- 28) dito.
- 29) dito.
- 30) 『相愛女子大学・女子短期大学研究論集』音楽学部編, 第29卷, 第30卷, 拙稿参照。
- 31) 『相愛大学研究論集』第1卷, 拙稿参照。
- 32) 5966—5969.
und ensolte dirre schande
nieman anders widerstan,
ezn müese mit einwige ergan
oder aber mit lantvehte.
- 33) 6362—6388.
ir aller keiner brichet
weder triuwe noch eit.
ein gelübede unde ein sicherheit
wart wilent under iu getan,
die sol man ouch noch stæte lan :
dazs alle jar zIrlanden
mit guotem willen sanden
von Curnwal und von Engelant
den zins, der in da wart benant,
oder aber si sazten sich ze wer
mit einwige oder mit lanther.
sints iu der dinge noch bereit
und loesent ir triuwe unde ir eit
mit zinse oder aber mit vehte,
so tuonts iu allez rehte.
herre, hie zuo denket ir :
beratet iuch und saget mir,
weder iu lieber si getan ;
an swederz ir iuch wellet lan,
an kampf oder aber an lantstrit,
des sit ir nu und alle zit
an uns gewis und ouch gewert.
ez müezen doch sper unde swert
under uns und iu bescheiden :
nu kieset under den beiden
ir einez unde saget uns daz :
der zins enlichet nu niht baz.
- 34) 6392—6400.
min ist hie nu niht alse vil,
daz ich ze lantstrite

iht gewerliche rite.
ich vuor von lande über mer
mit einem heinlichen her
und kam vil vrideliche
her in disiu riche,
als ich e males han getan.
ich wande, ez sus niht solte ergan.

35) 6407—6414.

Tristan sprach : ' herre, ist iuwer muot
zeinem lantstrite guot,
so keret umbe zehant,
vart wider heim in iuwer lant,
besendet iuwer ritterschaft,
besamenet alle iuwer craft
und kumet her wider und lat uns sehen,
wie unde waz uns süle geschehen ;

36) R. Krohn : ibid. S. 84f.

37) 6266—6302.

man hat den zins nu manegen tac
von hinnen und von Engelant
zIrlanden ane reht gesant ;
dar zuo brach ez sich lange
mit michelem getwange,
mit manigem gewalte ;
wan man den landen valte
beidiu bürge und stete
und in ouch an den liuten tete
so grozen und so manegen schaden,
biz daz si wurden überladen
mit gewalte und mit unrehte,
unz daz die guoten knehte,
die dannoch waren genesen,
die muosen undertænic wesen
alles des man in gebot,
durch daz si vorhten den tot
und enmohten, alse in was getan,
die zit niht anders an gegan.
als ist daz michel unreht,
als ir noch hiutes tages seht,
an in begangen iemer sit

und wære zware lange zit,
daz si der grozen swacheit
mit wige hæten widerseit ;
wan si sint sere vür komen :
diu lant diu habent zuo genomen
an kunden unde an gesten,
an steten unde an vesten,
an guote und an den eren.
man sol ez wider keren
daz unz her verkeret ist,
wan unser aller genist
muoz sus hin an gewalte wesen :
sul wir iemer genesen,
daz müeze wir beherten
mit wige und mit herverten.

38) L.Okken : ibid. S. 320f.

39) 6439—6449.

ez ist wol der geloube min,
Gurmun welle ane sorge sin
umbe sin liut und umb sin lant
vor iuwerm vanen unde iuwer hant.
ouch wirt dise übermüetekeit,
man enbreche uns danne triuwe und eit,
niemer gespart zIrlanden :
wir suln ez hie mit handen,
wir zwene under uns beiden
in einem ringe scheiden,
weder ir reht habet oder ich.

40) 6450—6453.

Tristan sprach aber : 'diz muoz ich
mit gotes helfe erzeigen,
und müeze den geveigen,
der unreht under uns beiden habe !'

41) 6456—6472.

'ir herren' sprach er 'nemet war :
der künec min herre und alle die,
die hie sin, die hoeren, wie
ich disen kampf bespreche,
daz ich daz reht niht breche :
daz min her Morolt, der hie stat,

noch der in her gesendet hat,
noch mit gewalt kein ander man
zins ze rehte nie gewan
ze Curnewal noch zEngelant :
daz wil ich mit miner hant
war machen und warbæren,
got unde der werlt bewæren
uf disen herren, der hie stat,
der unz her gevrumet hat
daz laster und daz ungemach,
daz disen zwein landen ie geschach.'

42) Rosemary Norah Combridge : Das Recht im ,Tristan'Gottfrieds von Strassburg 1964.
S. 51.

43) dito.

44) 6183—6186.

wan daz ich aber zer vehte
an gote und ouch an rehte
zwo sigebære helfe han,
die suln mit mir ze kampfe gan !

45) 6757……6783.

' küneec ' sprach er ' herre Marke,
nun sorget niht ze starke
umb minen lip und umb min leben :
wir suln ez allez gote ergeben.

……

unser sige und unser sælekeit
diun stat an keiner ritterschaft
wan an der einen gotes craft.

……

got selbe, der mit mir sol gan
ze ringe und ouch ze vehte,
der bringe reht ze rehte !
got muoz binamen mit mir gesigen
oder mit mir sigelos beligen :
der waltes unde müeze es pflegen !'

46) 6879.

der hæte vier manne craft,

47) 6883—6888.

daz eine got, daz ander reht,
daz dritte was ir zweier kneht

und ir gewærer dienstman,
 der wol gewære Tristan,
 daz vierde was willeger muot,
 dez wunder in den næten tuot.

48) 6980, 6996.

49) 7066—7080.

'so dir got Morolt, sag an,
 ist dir dirre mære iht kunt?
 mich dunket, du sist sere wunt;
 ich wæne, din dinc übele ste.
 swiez miner wunden erge,
 dir wære guoter wurze not:
 swaz so din swester Isot
 von erzenie hat gelesen,
 des wirt dir not, wiltu genesen.
 der rehte und der gewære got
 und gotes wærllich gebot
 die habent din unreht wol bedaht
 und reht an mir ze rehte braht.
 der müeze min ouch vürbaz pflegen!
 disiu hohvart diust gelegen.'

50) 7081—7085.

hie mite trat er im naher baz.
 daz swert daz nam er und gab daz
 ze beiden sinen handen:
 er sluoc sinem anden
 daz houbet mit der cuppen abe.

51) R. N. Combridge: *ibid.* S. 52.

52) *ditto.*

53) *ditto*: S. 50.

54) Ulrich Stöckle: *Die theologischen Ausdrücke und Wendungen im Tristan Gottfrieds von Strassburg.* 1915. S. 71f.

Alex. J. Denomy: *Tristan and the Morholt: David and Goliath.* In: *Mediaeval Studies* 18 (1956). p. 224—232.

Tristan und Îsolt by Gottfried von Strassburg. Edited by AUGUST CLOSS 1965. p. xxii.
 L. Okken: *ibid.* S. 305f.

55) A. J. Denomy: *ibid.* p. 228 fn. 43.

R. N. Combridge: *ibid.* S. 53.

56) R. Krohn: *ibid.* S. 89.

57) *ditto.*

参考文献

- Gottfried von Strassburg: Tristan. Hrsg. von Karl Marold. (Walter de Gruyter 1977.)
- Gottfried von Strassburg: Tristan. Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein hrsg. von Peter Ganz. 2 Bde. (F. A. Brockhaus 1978.)
- Gottfried von Strassburg: Tristan. Translated entire for the first time. (Penguin Books 1972.)
- Gottfried von Strassburg: Tristan und Isolde. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen und erläutert von Günter Kramer. (Verlag der Nation 1970.)
- Gottfried von Strassburg: Tristan. Übersetzt von Xenja von Ertzdorff, Doris Scholz und Carola Voelkel. (W. Fink Verlag 1979.)
- Gottfried von Strassburg: Tristan und Isold. Nach der Übertragung von Hermann Kurtz bearbeitet von Wolfgang Mohr. (Kümmerle Verlag 1979.)
- 『トリスタンとイゾルデ』石川敬三訳，郁文堂，1976.
- 『中世の世界』L. ジェニコ著，創文社，1977.
- 『ヨーロッパ中世史』モーリス・キーン著，芸立出版，1984.
- 『世界の歴史3 中世ヨーロッパ』中公文庫，1974.